

文化遺産国際協力コンソーシアムによる バハレーン王国協力相手国調査

原田 怜・後藤 健・西藤 清秀・安倍 雅史

Survey on the Protection of Cultural Heritage in Bahrain by Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage

Rei HARADA, Takeshi GOTOH, Kiyohide SAITO and Masashi ABE

キーワード：文化遺産保護、国際協力、バハレーン湾岸、相手国調査

Key-words: cultural heritage protection, international cooperation, Bahrain Gulf, assessment survey

1. はじめに

文化遺産国際協力コンソーシアムは、2012年12月16日から12月23日まで、会員である筆者ら4名をバハレーン王国（以下バハレーン）に派遣して、同国の文化遺産保護に関する協力相手国調査を実施した。バハレーン側からの我が国に対する具体的な協力内容を探ると同時に、我が国として、対応が可能かを検討するためのものであった。

本稿は、文化遺産保護分野での国際協力の可能性に関する調査の報告であり、まず文化遺産国際協力コンソーシアムの組織について紹介し、本調査の背景についての説明の後、バハレーンの文化遺産の概要と現状、課題、関連する文化遺産保護体制について述べる。最後にバハレーンの文化遺産保護への協力の可能性と協力実行のための基盤作りについて提案する。

2. 文化遺産国際協力コンソーシアムと国際協力の推進

はじめに、文化遺産国際協力コンソーシアム（以下コンソーシアム）の内容を紹介したい。2001年のアフガニスタンのバーミヤーン遺跡における大仏の破壊、それに続く2003年のイラク戦争における文化財の被害を受け、我が国でも文化遺産保護の分野での積極的な国際貢献の在り方に関する議論が起こった。この議論を受け、国会では、超党派議員によって提出された「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する法律」が2006年に成立、公布され、海外の文化遺産保護に係る国際協力について、国や教育研究機関の果たすべき責務や関係機関の連携強化など、国が講ずるべき施策が定められた。同時に、国内の政府機関、教育研究機関、NGOなどが連携組織を形成し協調的な共通基盤を確立することを目指して、コンソーシアムが設立された。

これまでの日本の文化遺産保護の分野での国際協力に関しては、それに関わる専門家と関係諸機関の連携の欠如、専門家の不足、国際協力を進める核となる機関がないため継続的な活動が困難である、といった問題点が指摘されてきた。コンソーシアムは、国内の各政府機関、教育研究機関、財団、NGOなどの民間団体がそれぞれの得意分野を活かして活動するためのネットワークの構築を行うことで、この問題を解決し、文化遺産の国際協力をより効果的に推進することを目指している（図1）。

文化遺産国際協力コンソーシアム



図1 文化遺産国際協力コンソーシアムの組織図

表1 行動記録

日付	地図対応番号	訪問場所(日本語)	訪問場所(英語)	訪問場所(アラビア語)
2011/12/17	1	カラートウ・ル＝バハレーンとカラートウ・ル＝バハレーン博物館	Qal'at al-Bahrain and Qal'at al-Bahrain Site Museum	قلعة البحرين و متحف موقع قلعة البحرين
	1-1	カラートウ・ル＝バハレーン	Qal'at al-Bahrain	قلعة البحرين
	1-2	カラートウ・ル＝バハレーン博物館	Qal'at al-Bahrain Site Museum	متحف موقع قلعة البحرين
2011/12/18	2	バハレーン国立博物館	Bahrain National Museum	متحف البحرين الوطني
	3	ウンム・ジドル古墳群	Umm Jidr Burial Mounds	تلال مدافن أم جدر
	4	ハマド・タウン古墳群	Hamad Town Burial Mounds	تلال مدافن مدينة حمد
	4-1	ダール・クレイブ古墳群	Dar Kulayb Burial Mounds	تلال مدافن دار كليب
	4-2	カルザッカ古墳群	Karzakkan Burial Mounds	تلال مدافن كر زكان
	4-3	ブーリー古墳群	Buri Burial Mounds	تلال مدافن بوري
	4-4	タイロス期古墳群	Burial Mounds in Tylos Age	تلال مدافن في الفترة تايوس
	4-5	イスラム期カーナート	Qanat in Islamic Age	قنوات الري في الفترة الإسلامية
	5	アラド・フォート	Arad Fort	قلعة عراد
	6	ムハラックの歴史的建造物	Historical Buildings in Muharraq	المباني التاريخية في المحرق
	6-1	シャイフ・サルマーン・ハウス	Shaikh Salman House	بيت الشيخ سلمان
	6-2	シャイフ・イーサー・ビン・アリー・ハウス	Shaikh Isa Bin Ali House	بيت الشيخ عيسى بن علي
	6-3	スイヤーディー・ハウス	Seyadi House	بيت سيادي
	6-4	コーラル・ハウス	Kurar House	بيت كزار
	6-5	コーヒー・ハウス	House of Coffee	بيت القهوة
6-6	アブドゥッラー・アッ＝ザーイド・ハウス	Abdullah az-Zayed House	بيت عبدالله الزايد	
6-7	シャイフ・イブラーヒーム・ビン・ムハンマド・アル＝ハリーフ文化研究センター	Shaikh Ebrahim Bin Mohammed al-Khalifa Center for Culture and Research	مركز الشيخ إبراهيم بن محمد الخليفة للثقافة و البحوث	
2011/12/19	7	アアリ古墳群	A'ali Burial Mounds	تلال مدافن عالي
	7-1	アアリ古墳群	A'ali Burial Mounds	تلال مدافن عالي
	7-2	アアリ王墓	A'ali Royal Mounds	قبور المارك عالي
	8	アル＝ハミース・モスク	Al-Khamis Mosque	مسجد الخميس
	9	コーラン博物館	Beit al-Qur'an (House of Qur'an)	بيت القرآن
2011/12/20	10	ジャヌサン古墳群	Jannusan Burial Mounds	تلال مدافن جنوسان
	11	バルバール神殿	Barbar Temple	معبد باربار
	12	アイン・ウンム・ツ＝スジュール遺跡	Ain Umm as-Sujour Site	موقع عين أم السجور
	13	ジャンビヤ古墳群	Janabiya Burial Mounds	تلال مدافن الجنبية
	14	サール遺跡	Saar Archaeological Site	موقع سار الأثري
	14-1	サール集落遺跡	Saar Settlement	مستوطنة سار
	14-2	サール墓地遺跡	Saar Cemetery	مدافن سار المتشبكة
	15	シャイフ・サルマーン・ビン・アフマド・アル＝ファティフ砦	Shaikh Salman Bin Ahmed al-Fateh Fort	قلعة الشيخ سلمان بن أحمد الفاتح
2011/12/21	2	文化省(バハレーン国立博物館隣接地)	Ministry of Culture	وزارة الثقافة
	16	アル＝マクシャ古墳群	Al-Maqsha Burial Mounds	تلال مدافن المقشع
	17	ディラズ神殿	Diraz Temple	معبد الدراز
	18	ムカバ古墳群	Muqaba Burial Mounds	تلال مدافن المقابة
	19	シャホーラ古墳群	Shakhura Burial Mounds	تلال مدافن الشاخورة
	20	アル＝ハジャール墓地遺跡	Al-Hajar Cemetery	مدافن الحجر
2011/12/22	21	スーク・ル＝カイサリヤ	Suq al-Qisariya	سوق القيسرية

コンソーシアムでは、その活動の中で文化遺産国際協力に関する調査研究を行い、我が国による協力事業を推進するために、協力相手国における文化遺産保護状況や他国からの支援状況等に関する情報収集を行い、また発信している。これまでに同様の調査は、ラオス、モンゴル、イエメン、ブータン、アルメニア、ミクロネシア、ミャンマーなどで実施されてきた。ここで報告する2012年12月の調査も、コンソーシアムによるこの活動の一環である。

3. 調査の背景と経緯

2007年に独立行政法人国際交流基金がバハレーン情報省芸術文化局文化国家遺産次官補(当時)であったシェイハ・マイ王女を招聘した際、日本がアラブ諸国の文化遺産の保護に関する協力を多数行っていることから、バハレーンの文化遺産の保護に対しても協力が可能かコンソーシアムに相談があった。その後もコンソーシアムが情報収集を行い、現地の文化省(Ministry of Culture)の担当官と連絡を続けた結果、2011年10月に文化省文化自然遺産部考古遺産局文化遺産保存修復担当官主任であるサルマーン・ア

フマド・アル＝マハーリー氏より文化遺産保護分野における協力依頼があった。このため、今後日本の専門家や関係機関が協力できる分野を正確に把握するため、2011年12月にコンソーシアムより調査団を派遣した。

4. バハレーン文化遺産の概要と現状、そして課題

アラビア半島東岸にあるバハレーンは、バハレーン本島を中心とする33の島嶼群からなり、国土面積は奄美大島とほぼ同大の757.5平方キロメートルである。主要な文化遺産及びその関連施設としては、世界有数の古墳群を初めとする考古遺跡や、歴史的建造物群、文化財の保管・研究・公開施設としての博物館などがある。

渡航前にあらかじめアル＝マハーリー氏に連絡を取り、日本側へ協力依頼を予定している文化遺産を指定するように依頼した。調査期間内には、バハレーン側が指定した文化遺産を中心に調査を実施した。実質5日間という短い調査期間にもかかわらず、計22の遺跡、9つの歴史的建造物の視察を行い、また、博物館など4つの関連施設の見学を実施した(表1、図2)。

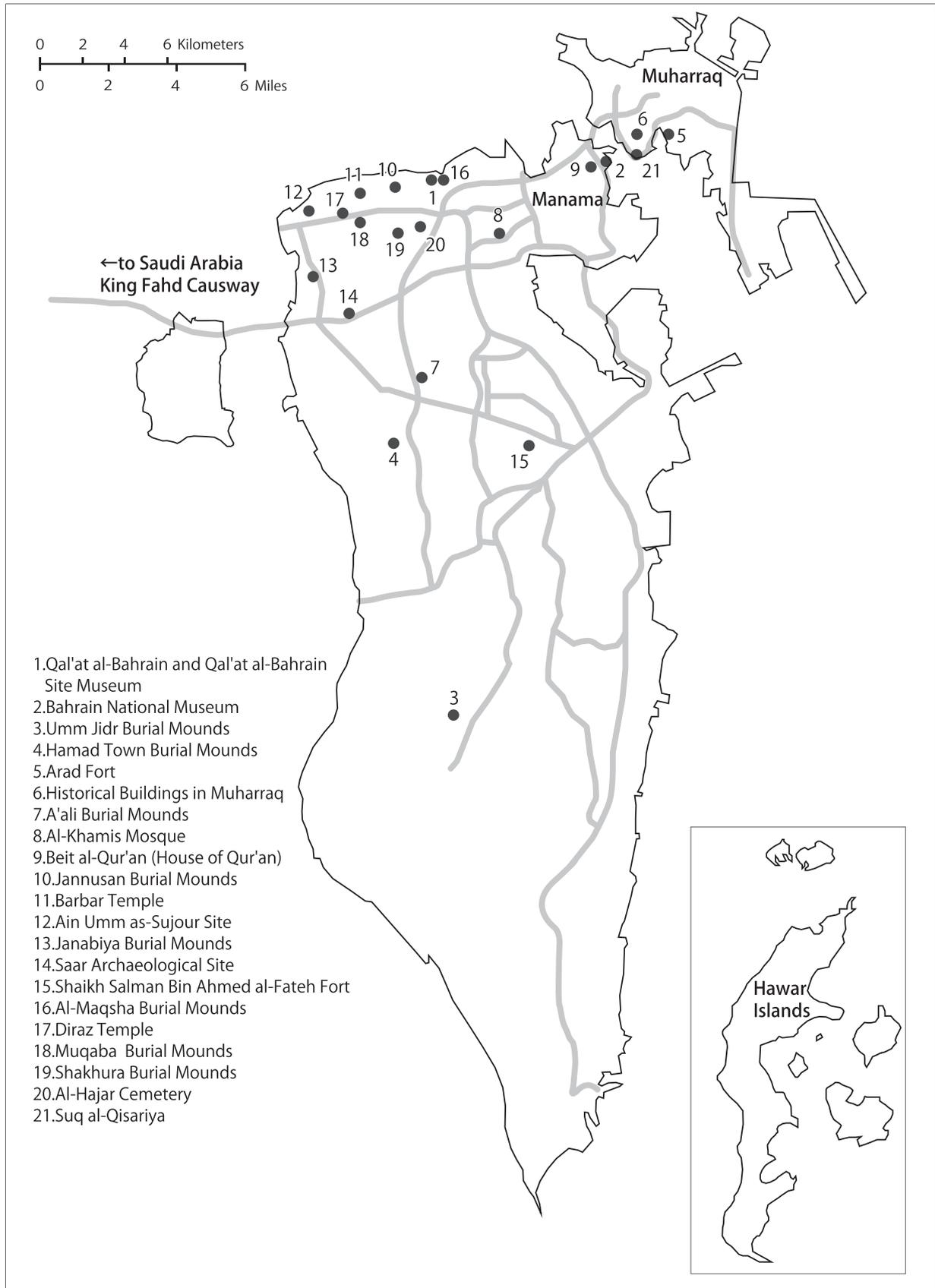


図2 バハレーン島拡大地図（訪問場所対応）

表2 面談者一覧

名前	役職	組織
Mubarak Mohamed Taher	Sr. Public Relations Specialist	Ministry of Culture
مبارك محمد طاهر	أخصائي علاقات عامة أول	وزارة الثقافة
ムバーラク・ムハンマド・ターヘル	広報上級スペシャリスト	文化省
Dawood Youzif	Archaeologist	Ministry of Culture
داود يوسف	اثاري	وزارة الثقافة
ダウード・ヨウゼフ	考古学者	文化省
Abdulla Mohammed as-Sulaiiti	Director of Archaeology and Heritage	Ministry of Culture
عبد الله محمد السليطي	مدير إدارة الآثار و التراث	وزارة الثقافة
アブドゥッラー・ムハンマド・アツ=スレイティー	考古遺産局長	文化省
Salman Ahmed al-Mahari	Chief of Conservation and Restoration, Department of Archaeology and Heritage	Ministry of Culture
سلمان أحمد المحاري	رئيس قسم ترميم و صيانة الآثار	وزارة الثقافة
サルマーン・アフマド・アル=マハーリー	考古遺産局保存修復主任	文化省
Mustafa Ebrahim Salman	Archaeology Curator	Ministry of Culture
مصطفى إبراهيم سلمان	أمين متحف الآثار	وزارة الثقافة
ムスタファー・イブラーヒーム・サルマーン	パハレーン国立博物館担当官	文化省
Saeed Abdulla al-Khuzai	Natural Heritage Advisor (Bahraini Delegation to the World Heritage Committee)	Ministry of Culture
سعيد عبد الله الخزاعي	خبير التراث الطبيعي الوفد البحريني بلجنة التراث العالمي	وزارة الثقافة
サイード・アブドゥッラー・アル=フザイー	世界遺産委員会アドバイザー	文化省
Haya as-Sada	Bahraini Delegation to the World Heritage Committee Unit for the Establishment of the Arab Regional Center for World Heritage (ARC-WH)	Ministry of Culture
هيا أحمد السادة	الوفد البحريني بلجنة التراث العالمي و وحدة تاسيس المركز الإقليمي العربي التراث العالمي	وزارة الثقافة
ハヤー・アフマド・アツ=サーダ	世界遺産委員会パハレーン代表および世界遺産に関するアラブ地域センターの設立のためのユニット担当者	文化省
Khalid Mohammad Ebrahim as-Sindi	Archaeologist	Ministry of Culture
خالد محمد إبراهيم السندي	اثاري	وزارة الثقافة
ハーリド・ムハンマド・イブラーヒーム・アツ=シンディー	考古学者	文化省
Nadine Boksmati	Museums Advisor	Ministry of Culture
ندين بكسماتي	خبيرة متاحف	وزارة الثقافة
ナディーン・ブクスマティー	パハレーン国立博物館アドバイザー	文化省
Khalifa bin Ahmed al-Khalifa	Department of Archaeology and Heritage	Ministry of Culture
خليفة بن أحمد الخليفة	قطاع الثقافة و التراث الوطني	وزارة الثقافة
ハリファ・ビン・アフマド・アル=ハリファ	考古遺産局スタッフ	文化省
Alaa al-Habashi	Founder, General Manager (Ph.D)	Turath Conservation Group
علاء الحبشي	مدير عام	مجموعة تراث الحفاظ و الترميم تصميم وإدارة مشاريع ترميم
アラール・アル=ハバシー	設立者	トウルス・コンサベーション・グループ

さらに、パハレーンの文化遺産保護の専門家との面談を行った(表2)。前もって質問事項を送付し、それに沿って情報収集を行った。また、日本側の専門家より、日本の文化遺産保護状況や人材育成に関する短い報告を行い、意見交換を行う場も設けた。その中で、日本に対して協力依頼のあった遺産の現状と課題を中心に以下述べる。

古墳群

かつてパハレーン島には約17万基の古墳が存在した。その多くは前期ディルムン時代(前2200~前1800年頃)に造営されたものであったが、1970年代以降の高度経済成長期に、開発事業に伴い多数が消失し、現在では約7万基が残されている。消失した古墳のうち、緊急発掘調査が行われたのは、約8000基とされる。2000年頃以降、パハレーンでは開発に伴う緊急発掘も一段落した状態が続いて

おり、遺跡を中心とした文化遺産の保護・整備がパハレーン考古局によって実施されている他、フランス、デンマークも継続的に調査を続けている。

古墳群に関する課題として、詳細な学術調査と古墳の価値を伝える保護整備の二点が挙げられる。まず一点目の学術調査に関しては、経済発展による開発事業に伴って行われた緊急発掘が一段落した今、改めて自国の持つ文化遺産の重要性が認知されていることが背景にある。パハレーン政府は、アアリ(A'ali)(図3-5)、サール(Saar)、ブーリー(Buri)(図6)、ウムム・ジドル(Umm Jidr)、ジャナビーヤ(Janabiya)などを含む古墳群のユネスコ世界遺産登録を目指しており、現在申請書の作成も含め、改めて詳細な学術発掘調査が求められている。このため、発掘及び遺物の科学分析、建築学、形質人類学も含めた多様な専門家の参加による総合的調査が必要であるとのことである。



図3 アアリ王墓

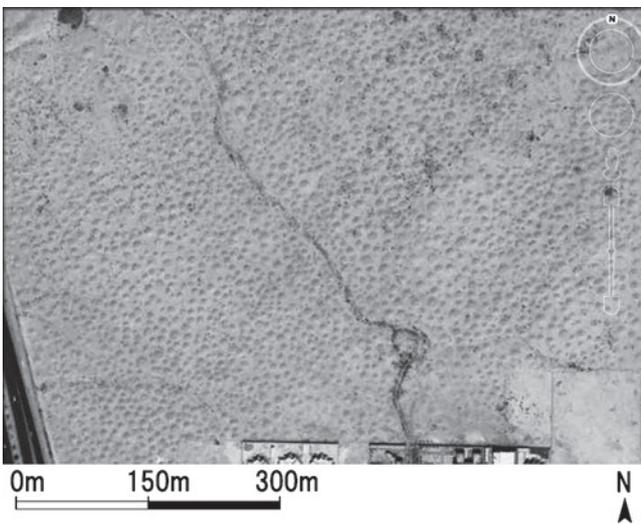


図4 アアリ古墳群航空写真 (Google 衛星写真を加工)

二点目の古墳の保護整備に関しては、現在、遺跡における盗掘、ゴミの不法投棄、石材・砂利採りに伴う破壊が問題視されていることが理由にある。政府は罰則を設け、注意を促す看板や遺跡を囲うフェンスを設置するなどの施策は実行しているが、遺跡の周辺に説明のための表示板等はない。このため、地元住民や観光客に遺跡の意義を伝えるためにも、遺跡の保護整備と表示板や展示施設の設置による活用が必要である。バハレーン政府は、アアリ、サールにはサイトミュージアムの建設を計画しており、内部の展示についての詳細を検討している段階である。今後は様々なサイトミュージアムを見学し、内部の展示方法や設備などを検討したいとのことであった。

カラートゥ・ル＝バハレーン

カラートゥ・ル＝バハレーン (Qal'at al-Bahrain) は、バハレーン王国の首都マナマから西へ約5キロメートル、バハレーン島北海岸に面する遺丘である。遺丘の高さは

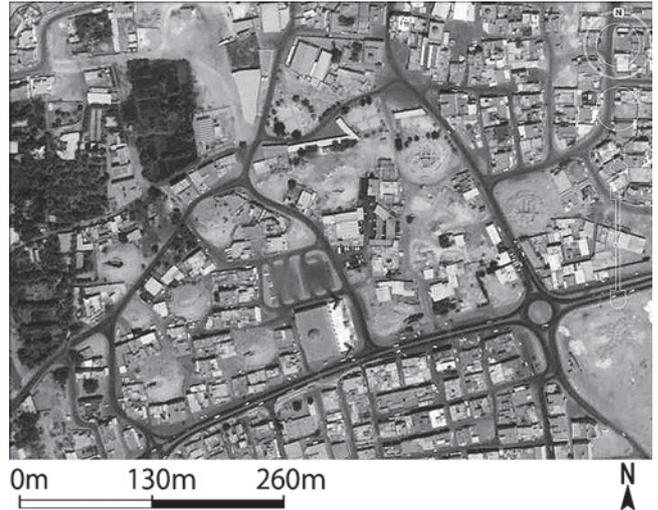


図5 アアリ古墳群航空写真 (Google 衛星写真を加工)



図6 ブーリー古墳群

12メートル、大きさは300メートル×600メートル程度で、前2200年から後16世紀にかけて連綿と居住された遺跡である。

カラートゥ・ル＝バハレーンで初めて発掘調査を実施したのはデンマーク隊であり、1954年から1978年にかけて、毎年この遺丘の発掘調査を実施した。1977年にはフランス隊が発掘調査に参入し、現在まで継続して発掘調査を行なっている

カラートゥ・ル＝バハレーンの最下層からは、紀元前2200年に遡る城壁集落が発掘されている。カラートゥ・ル＝バハレーンからは、商業取引で用いたメソポタミアやインダス式の印章や分銅、メソポタミアやイラン産の土器などが出土している。カラートゥ・ル＝バハレーンは、その後も、前2千年紀、前1千年紀を通じて居住された。現在、遺跡を覆っているのがポルトガル砦である。バハレーンはペルシア湾の海上交通の要所にあるため、特に16世



図7 カラートゥ・ル=バハレーン



図9 国立博物館正面



図8 カラートゥ・ル=バハレーンとサイトミュージアム

紀、ペルシア湾の海上交易を押さえるため、ポルトガルやイラン、オスマン帝国がバハレーン島をめぐる激しく戦闘を繰り返した。その攻防の舞台となったのが、このポルトガル砦である。1561年に、ポルトガル人が、現在見られる姿にこの砦を改築した。

このカラートゥ・ル=バハレーンは、遺跡の持つ顕著かつ普遍的な価値が認められ、バハレーン初の世界遺産として、2005年にユネスコ世界文化遺産に記載された。現在は、ポルトガル砦を中心に復元・修復が進み、観光用のパスや音声ガイドも整備されている(図7、図8)。また、2008年には、遺跡のすぐ脇にサイトミュージアムが建設されている。

カラートゥ・ル=バハレーンの課題は、バッファゾーンの考古学分布調査と、遺構の発掘調査が挙げられる。一点目の課題であるバッファゾーンとは、カラートゥ・ル=バハレーンの周囲を囲むナツメヤシ畑である。このナツメヤシ畑は、遺跡を保護するためバッファゾーンに指定されている。しかし、近年の発掘調査によって、このバッファゾーン内からもイスラーム期の邸宅址が発見されるなど、

バッファゾーン内にも貴重な考古遺跡が存在することが明らかになっている。バッファゾーンは、将来的に、市街地の発達に巻き込まれる可能性があり、世界遺産委員会より詳細な保存管理計画の作成が求められている。

二点目の課題は、ポルトガル砦内にあるキャプテンタワーと呼ばれる遺構の発掘・修復である。この遺構は、砦の中心に位置する二階建ての遺構であるが、現在崩壊が進んでおり立ち入ることができない。しかしながら、ポルトガル砦の見どころとなりえる中心的な遺構であるため、遺跡の整備のための発掘・修復が求められている。

バハレーン国立博物館

バハレーン国立博物館は、1988年に開館した国立博物館である(図9)。バハレーン島の北東部に位置し、フロア面積は20,000平方メートルにも及び、デンマークのウォラート建築事務所がデザインを手がけた、近代的な建物である。

石器時代から現代までのバハレーンの歴史と風土を「ディルムン時代」、「タイロス時代とイスラーム時代」、「墓」、「古文書」、「慣習と伝統」、「伝統工芸品と貿易」、「自然史」の7つの展示ホールに分け、わかりやすく展示している。また、展示物の温湿度は管理されており、展示環境も管理されている。保管庫での遺物の管理も体系立って行われている。収蔵品の目録(紙)は作成されており、電子化にも着手している。

これら常設の展示ホールのほか、カフェやミュージアム・ショップ、講堂、学習室、特別展示ホールなども併設されている。展示はわかりやすく随所に工夫が見られる。例えば、「墓」の常設展示ホールには、ディルムン時代からタイロス時代までの各種の古墳が展示ホール内に移築され、迫力ある展示となっている。

博物館に関する課題としては、博物館学と保存修復分野

における人材育成が挙げられる。現在、保存修復担当者は2名いるが、収蔵品の内容・量と比較すると、人手不足の感がある。また、現在行われている保存修復技術に関して、日本からの技術を学び更新していきたいとの要望があった。特に、紙製品に関しては、コーランをはじめとする歴史文書の保存修復に日本の技術を導入したいとの要望があった。現在、バハレーン国内には博物館学と保存修復を専門的に教える大学がなく、長期的な人材育成が必要であると考えられる。

ムハラック地区の歴史的建造物保存地区

港を中心に建設された歴史的町並みで、現在の建造物は19世紀に建設されたものが中心である。真珠産業による繁栄が19世紀末から20世紀初頭のムハラック地区の都市の発展に表れているとの理由により、2012年に一帯が世界文化遺産として記載された。

歴史的建造物保存地区一帯は、1995年の文化財保護法の下、2010年より保護されており、文化省の管轄にある。2011年には文化省がムハラック旧市街の発展計画を策定、バッファゾーンを制定した。これにより、この地域の文化遺産はより包括的な管理下に置かれることとなり、具体的には無計画な開発や歴史的建造物の崩壊などについて管理が行き届くこととなった。また、12の省庁と土地所有者や企業代表者が参画する管理のための運営委員会が設けられたほか、下部組織として文化遺産に関する専門家委員会も発足し、管理のための枠組みも整えられた。

歴史的建造物に関する課題としては、現場の作業は主に外国人労働者によって実施されているため、バハレーン人の専門家が不足していることが挙げられる。石膏による室内装飾の修復など、技術の必要な作業は修復分野の修士号を持っている外国人専門家が担当している。このため、初級から中級の修復技術を持つ専門家の育成が課題であるが、バハレーンの高等教育機関では保存修復に関して教える場所は無いため、文化省下に専門的な内容を教える機関の設置を計画している(図10)。

5. バハレーンの文化遺産保護体制

1973年に制定された憲法は2002年に改正された。その中で、世襲君主制の王国に体制変更し、普通選挙を含む二院制議会を設置するなど民主化路線が進められた。国王は実質的に三権を掌握している。行政は18の省から構成され、国内は5つの行政地域に区分されている。このうち文化遺産保護を担当しているのは文化省である。

文化遺産に関する法律

バハレーンの文化遺産保護に関する法律としては、1970



図10 修復中のシャイフ・サルマーン・ハウス

年に「遺物に関する法」The Bahrain Antiquities Ordinanceが制定され、1985年に改正が行われている。1995年には、「文化財の保護に関する法11号」Decree Law No.(11) Regarding the Protection of Antiquitiesが新たに制定され、先行の法律は無効となった。両法律とも、原文はアラビア語で書かれているが、英語に翻訳されたものがユネスコのウェブサイトから入手できる。

「文化財の保護に関する法11号」の第1章第1節において情報省(現文化省)が文化遺産の監督、保護、管理を行うと規定されている。第1章では、ほかにも保護のための施策や登録に関して記載があり、文化財登録は情報省が選定を行うこと、文化遺産には動産・不動産があり、不動産には考古遺跡だけではなく建造物も含むこと、土地所有者はその土地の文化遺産の所有権を保持しないこと、土地開発の計画が文化遺産所在地の近郊である場合、情報省は必要な情報を開示し関係省庁間の調整を図ること、情報省は公的な目的のために土地を買収すること、などが規定されている。第2章以降では、発掘や発掘に伴う許可、文化遺産の登録や管理、罰則について規定されている。

この法律以外に明文化されている文化遺産保護に関する法的拘束力を持つ取り決め(地域条例、保存計画、観光開発計画など)として、世界遺産であるカラトウ・ル=バハレーン(Qal'at al-Bahrain -Ancient Harbor and Capital of Dilmun)およびムハラックの歴史的建造物保存地区(Pearling, Testimony of an Island Economy)の管理計画がある。

上記の通り、バハレーンは文化遺産保護に関する条約として、1991年に世界遺産条約を批准している。2007年から2011年にかけては委員国も務めている。バハレーンの世界遺産には、2005年に文化遺産として記載されたカラトウ・ル=バハレーン、2012年に記載されたムハラックの歴史的建造物保存地区がある。現在、文化遺産と

しては2件、自然遺産としては1件が、暫定リストに登録されている。文化遺産が、パールパール神殿 (Barbar Temple, 2001年申請)、ディルムンおよびタイロス時代の古墳群 (Burial Ensembles of Dilmun and Tylos, 2008年申請)、自然遺産がハワール島保護区 (Hawar Islands Reserve, 2001年申請) である。

そのほかの有効な条約としては、「武力紛争の際の文化財の保護のための条約 (ハーグ条約)・付属議定書」が挙げられる。また、「文化財の不法な輸入、輸出および所有権譲渡の禁止および防止の手段に関する条約」、「水中文化遺産保護に関する条約」、「無形文化遺産の保護に関する条約」、「文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約」に関しては、批准の方向にあり、実現すれば法改正が行われることが見込まれる。

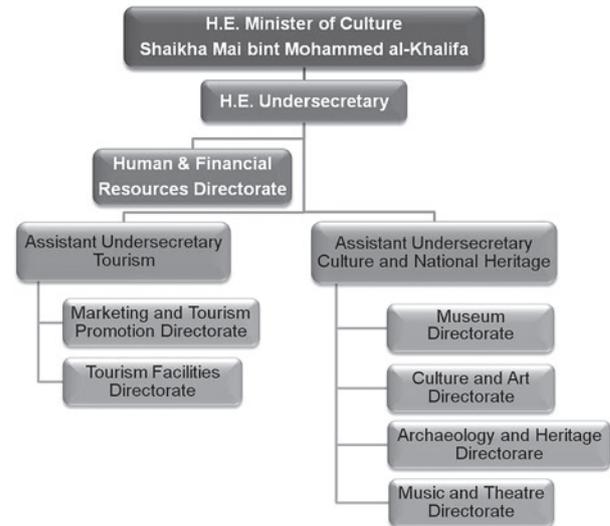


図11 文化省組織図

(バハレーン文化省ウェブサイト <http://www.moc.gov.bh>)

文化遺産に関する行政

文化遺産保護を担当する行政は、文化省のみである。国内を5つの行政地域に分けているものの、文化遺産保護に関しては文化省が唯一の担当行政であり、地方行政は文化遺産保護に関与していない。文化省では無形文化遺産と有形文化遺産ともに扱っている。なお、現在の文化大臣はシェイハ・マイ王女である。

文化省となる以前は、情報省であったが、文化情報省を経て、2010年に文化省となった。文化情報省(当時)の中、文化自然遺産部 (Culture and National Heritage) の下にある考古遺産局 (Archaeology and Heritage) が文化遺産を担当していたとみられる。省庁再編が続いていたが、最終的に文化省になったことで、省庁内での文化に関する予算の検討が容易になるなどのメリットがあった。

現在は、文化省の中には、観光部と文化自然遺産部の2部署のみ存在する。文化自然遺産部の中には考古遺産局のほか、博物館局、文化芸術局、音楽演劇局が設置されている(図11)。文化遺産保護に直接関わる考古遺産局および博物館局の業務については、以下のとおりである。

考古遺産局：有形・無形を含む遺産の保護および文化遺産保護のための認識を促す。文化遺産の管理、考古発掘、海外隊の発掘の管理、修復を行う。遺産部門、考古部門、修復部門の3部門に分かれている。聞き取り調査では、本局に所属するスタッフは75名程、遺産部門に所属するスタッフは7名程とのことである。

博物館局：バハレーンに所在する全ての博物館の計画・運営を行う。バハレーン国立博物館もこの博物館局の管轄である。バハレーンの文化・歴史を紹介し観光に寄与するような展示の企画をする。

文化省附属機関としては、世界遺産アラブ地域センター (Arab Regional Center for World Heritage、通称 ARC-

WH) が挙げられる。設立の背景は、2000年の「アラブ地域の世界遺産条約の履行に係る定期報告」の中で、アラブ地域における世界遺産条約に関する理解の強化と履行のための作業指針の適用に関する必要性が確認されたことにある。これを受けて、2008年世界遺産委員会において、バハレーンがアラブ地域の世界遺産保護のための地域センターをユネスコカテゴリー2センターとして発足することを提案し、これが承認された。その後、設立のための準備期間を経て、2012年4月に世界遺産アラブ地域センターが設立された。世界遺産アラブ地域センターの活動は、アラブ地域における世界遺産条約に関する情報の提供、条約履行のための人材育成などの支援活動、そのほか資金調達などの支援を行うことである。

文化遺産の保護に関する人的体制

全体として、文化遺産に関する保護と整備が進む一方で、それを担う国内の人材が不足している状況にある。バハレーンでは義務教育は無償であるが、国内に大学などの高等教育の場は限られているため、大学院に留学する場合は、他国、特にアラビア語圏であるエジプトなどに留学する。また、考古学に関してはバハレーンの大学に専門の学科は設置されていない。調査で訪れた文化遺産修復の現場でも、作業は海外(特にインド)からの労働者が担っており、少し高度な作業や現場監督は海外からのコンサルタントが担うという状況が確認された。このため、一部のバハレーン人が多くの任務を担っており、他は、海外からのコンサルタントが支援する状況にある。今後は海外からの知識供与を効率的に利用しつつ、国内の人材育成が必要である。短期のワークショップだけではなく、大学での学科開

設、海外への長期留学、海外の専門家の長期雇用等、バハレーン国内での文化遺産保護に係る分野全般の底上げが課題となる。

6. 今後の協力の可能性と日本の役割

聞き取り調査の結果、以下の二分野での日本によるバハレーンへの支援を検討したい。

古墳群の保存管理・整備についての技術支援（学術的発掘等）

日本の文化遺産保護行政では、文化遺産の保護のための学術的調査発掘、及び保護・管理・整備に関する施策を講じている。1980年代から日本がバハレーンの考古学の発展に寄与したことから、バハレーン側は発掘分野において日本に大きな期待をしている。そのため、古墳の総合的な発掘調査を希望している。

また、日本では、発掘後の調査結果は現地に説明板を設置するなど、遺跡を訪れた多くの人に伝わるよう工夫されている。また出土した考古遺物に関しては保管・保存・展示が日本では一般的に行われており、サイトミュージアムの整備も多く行われている。このため、バハレーンにおいても史跡整備のための古墳公園などの整備・展示に関する技術支援が求められている。

カラートゥ・ル＝バハレーンの保存・整備

カラートゥ・ル＝バハレーンはバハレーンの文化遺産として顕著な価値を有するものであり、観光地としても人気が高い。現在バハレーン考古局が整備を進めているものの、規模が大きいと、バッファゾーンを含めての詳細な保存管理計画の作成が緊急に求められている。保存管理計画に必要な考古学的基礎資料の作成のためには、ナツメヤシ畑を中心としたバッファゾーンでの分布調査が必要である。この調査は、発掘に比べ目途も立ちやすく短期間で調査ができる。一方で、崩壊が進んでいるキャプテンタワーの発掘と修復の要望については、事業の長期化が予想されるため、今後のほかの協力事業の成果をもとに、再検討することが妥当であると考えられる。

7. 文化遺産保護の支援のための基盤作り

支援の実現化のために必要な基盤作りに関して、以下具体的に提案する。

ステップ1「事業内容の情報共有」

今後継続してバハレーン支援を行うための基盤作りとして、日本国内の多くの研究者にバハレーンの現状を伝えることが重要となる。既に、コンソーシアム内に設置された

会議において報告しているほか、2012年6月の日本西アジア考古学会第17回総会・大会での発表や2012年11月の日本オリエント学会第54回大会におけるポスター発表を行っている。また、調査報告書を日英で作成し、コンソーシアムウェブサイトでも公開している。

ステップ2「招聘・派遣事業による学術交流」

古墳の調査・保存・活用の先進的知識を持つ日本の考古学者との交流、また日本の古墳整備の事例を実見してもらうために、バハレーンから専門家を招へいする。日本からも専門家を派遣し、バハレーンの文化遺産保護状況を実見する。これらの見学を通して、両国の意を同じくする研究者が相互に意見交換し、互いに古墳の保存・活用に向けた相乗的な効果が得られると考えられる。

具体的には2012年12月13日～26日の14日間、独立行政法人国際交流基金文化協力助成プログラム（申請者：西藤清秀）によるバハレーン考古学研究者招聘事業を行った。事業の目的は、東京、群馬、奈良、宮崎における古墳研究者との交流、古墳の整備状況の実見、バハレーンの専門家による講演会を通じての学術交流である。バハレーンからはアル＝マハーリ氏のほか、文化省において各遺跡の整備事業の財政面を担当しているレイラ・アリ・アフマド氏が参加した。群馬では、大室古墳群、保渡田古墳群、かみつけの里博物館、奈良では新沢千塚古墳群、植山古墳、馬見古墳群、宮崎では西都原古墳群、西都原考古博物館、新田原古墳群、生目古墳群などの発掘現場と整備状況を実見した。

その際に聞かれた意見の一例としては、現在バハレーンで利用されている金属製の遺跡説明板の老朽化が進んでいるため、今後は日本が採用しているような陶板による遺跡の説明を取り入れたいとのことがあった。また、博物館展示については、特に西都原古墳群のサイトミュージアムのような目新しい手法を取り入れた展示を、バハレーンのサイトミュージアムでも早速検討したいとのことだった。

ステップ3「発掘および分布調査の実施を通じての人材育成分野」

文化遺産保護に向けての課題、展望が共有された後は、発掘および分布調査の実施を検討する。バハレーン文化省との聞き取り調査の中では、発掘許可についてはバハレーン文化省が担当しており、許可を出すのは難しくないということが明らかになった。このため、両国間で合意が形成されれば、すでに課題として挙がっている古墳群の発掘調査およびカラートゥ・ル＝バハレーンのバッファゾーンにおける分布調査が可能である。バハレーン文化省あるいはバハレーン博物館を両国の協力拠点と位置付け、長期的な

事業実施を目指す。事業の中で予想される必要な人材については、日本から考古学、人類学、保存科学、修復技術者、博物館学、建築学等の専門家を派遣する。なお、事業は、バハレーンの若手専門家と共同で行い、人材育成の場とする。

他に要望があった博物館分野や歴史的建造物の分野は日本にも要請があったものの、上記二分野に比べると逼迫した状況ではないと判断したため、現在具体的な支援開始のための基盤作りのための情報収集を引き続きを行っている。

8. おわりに

調査を通じて、バハレーン側が文化遺産を中心として今後発展していくという方向性や、法制度や担当行政の基盤が整いつつあることが明らかになった。文化遺産保護を強力に推進していく国と、日本が今まで培ってきた学術的研究や保護管理制度についての経験を共有することは、両国にとって長期的な文化交流が育まれるだけではなく、今まで主に経済的な関わりを中心として発展してきた両国間の関係がより一層強固なものになると考えられる。2012年は日本バハレーン外交関係樹立40周年であり、このような新たな関係を模索する試みは今後の両国の発展の試金石としても重要だと考えられる。

アラブ諸国で民主化の動きが始まり、バハレーンもその波のさなかにある。しかし、短い滞在ながらも見えてきたのは、現地で文化遺産保護に係る担当者の意欲と海外からの先進的技術・知識を得ようとする積極的な動きである。バハレーン側と今回の調査で築いた信頼関係は今後も継続し、相手国が求める長期的な学術交流を確固たるものにするよう今後も関係諸機関と協議しながら、支援内容を検討していきたい。今後バハレーンの文化遺産への国際協力を通じて、両国の友好に貢献できれば幸いである。

最後に、コンソーシアムではこのような相手国調査を例年行い、調査手法や手順について検討を続けてきた。相手国の要望の聞き取り取り調査を行い、日本の支援の枠組みを理解したうえで、日本の得意とする分野と要望のマッチアップを行う手法は今後も必要となってくると考える。我が国の文化遺産支援の協力体制や取り組み方の効果的な在り方について引き続き検討していきたい。

なお、前述の通り、調査の報告書は2012年度内に刊行した。希望者に無料で配布したいと考えているので、コンソーシアム事務局まで連絡先をご一報いただければ幸いである。また、電子版も刊行と同時にコンソーシアムウェブサイト (<http://www.jcic-heritage.jp/>) で公開し、全文無料でダウンロード頂けるようになっている。

最後に、時間的制約がある調査ではあったが、効果的に調査を行うことができたのは、バハレーン文化省と事前に

連絡を取り合うことができ、またバハレーン文化省にはビザ発行や移動のための車の手配、または現地視察の際に担当者の同行等さまざまな便宜を図って頂いたことによる。特に、文化省所属の考古学者ハーリド・ムハンマド・イブラーヒム・アッ=シンディ氏と文化省文化自然遺産部考古遺産局文化遺産保護部門主任のサルマーン・アフマド・アル=マハーリー氏から協力を得た。この場を借りて感謝申し上げる。

なお、この調査結果の概要は、2012年6月に筑波大学にて開催された日本西アジア考古学会第17回総会・大会においてすでに発表済みであるが、発表後の日本、バハレーン両国側の取り組みの進展なども含めて、加筆・修正したものである。

参考文献

- 原田 怜・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史 2012『バハレーン王国調査報告書』文化遺産国際協力コンソーシアム。
 原田 怜・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史 2012「バハレーン国における文化遺産保護状況と今後の国際協力の可能性」『西アジア考古学会第17回総会・大会要旨集』83-87頁 日本西アジア考古学会。
 原田 怜・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史 2012「バハレーン王国に対する文化遺産国際協力調査について」『日本オリエント学会第54回大会公開講演・研究発表要旨集』65頁 日本オリエント学会。

原田 怜

文化遺産国際協力コンソーシアム

Rei HARADA

Japan Consortium for International Cooperation in
Cultural Heritage

後藤 健

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館

Takeshi GOTOH

Tokyo National Museum

西藤 清秀

奈良県立橿原考古学研究所

Kiyohide SAITO

Archaeological Institute of Kashihara, Nara

安倍 雅史

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所

Masashi ABE

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo